

イングランドの文化再構築を目指して

— ジョン・イーヴリンの “A Character of England” が意味するもの —

高野美千代

Toward the Reconstruction of Culture

— John Evelyn's Hidden Proposals in “A Character of England” —

TAKANO Michiyo

Abstract

John Evelyn anonymously published one of his tracts “A Character of England” in 1659. It is supposedly a letter by a French traveler depicting his true impressions and experiences during a visit to England. A great deal of English customs and manners are criticized as vulgar and morose; the buildings and the environment of London, disastrous. Since Evelyn was writing from a royalist's point of view, he tried to conceal his authorship under the Cromwell's reign, and by doing so he succeeded in pointing out boldly to the public what was missing in his contemporary England. Closely related to his Diary, “Character” voices Evelyn's own opinions and those proposals, which he later made in public.

One of the two main purposes of this study is to indicate the fact that this minor tract contains several important factors which would become cores of his future pieces of work, such as “Fumifugium,” “Tyrannus,” and “Londinium Redivivum.” The other purpose is to reveal Evelyn's strong belief that the reconstruction of the English cultural life and the recovery of its splendor would be brought about with the return of the monarchy.

キーワード：ジョン・イーヴリン (John Evelyn)、“A Character of England”

はじめに

1659年、オリバー・クロムウェル亡き後のイングランドは混乱を極めた。前年に没した偉大な護国卿は後継者に息子のリチャード・クロムウェルを指名したが、彼に対する人々の期待は薄かった。リチャードは議会と軍の双方を統制することができず、5月には護国卿を辞任する。その後は実質的には軍幹部の力が横行する時世となった。一方ではフランスに亡命中であったチャールズII世を祖国へと呼び戻し王政復古を実現する準備が

着実に続けられていた。ジョン・イーヴリン (John Evelyn, 1620-1706) が匿名で “A Character of England” を発表したのは、王政復古前年にあたるこの年のことである。

イーヴリンは1620年にサリー州の裕福な家系に生まれ、オックスフォード大学ベイリオルカレッジで教育を受けた。1641年に初めて大陸へ渡ったのを皮切りに、市民革命で荒れるイングランドを離れ1640年代の大半をフランスやイタリアなどのヨーロッパ諸国で過ごしている。そこでトマス・

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

ハワード (Thomas Howard, Earl of Arundel) をはじめとする亡命中のロイヤリストたちと親交を持ち、のちに国王の大使リチャード・ブラウン (Sir Richard Browne) のひとり娘 Mary と結婚することとなった。1647年から約2年間は帰国していたものの再びフランスへ渡って、共和制下の1652年祖国に戻った。ロイヤリストの彼はその後しばらくの間は目立った活動もせず、後世に名を残す“virtuoso”として表舞台に立ったのは王政復古後のことであった。今日、イーヴリンは自らの生涯をつづった日記でよく知られている。それはサミュエル・ピープス (Samuel Pepys, 1633-1703) の日記と並んで17世紀イングランドの日常を鮮明に伝える記録として貴重である。だが日記に限らず執筆活動をひたすら好んだ彼の著作数は今日ではあまり知られていないものも含めて全部で40点近くに及ぶ。ロイヤリストとして国王の帰還を求めるトラクトを執筆した功績を買われ、イーヴリンは王政復古期イングランドにおいて国王チャールズII世から厚く信頼され、1662年に発足した王立協会では中核的な存在となった。博識を生かして幅広い分野の問題を扱った彼の書物は多大な影響力を持っていた。若い時期をフランスで過ごしたことで養った客観的な視点から行った提言は、王政復古を待ちわびていたかのように1660年代に集中して出版されている。

現在に至るまでイーヴリンの著作は1660年の王政復古以降に出版されたものが主に脚光を浴びており、その価値を高く評価されている。代表作には *Sylva* (1664年) があり、これは特に造船用の木材を確保するための植林について提案する内容となっている。広く読まれ、18世紀前半にいたるまでに約10のエディションが出されている。その一方で1650年代末の印刷物、たとえば子どもの教育をテーマとした翻訳“Golden Book of St. Chrysostom”, ロイヤリストの視点からのトラクト“A Character of England”と“An Apology for the Royal Party”などについての注目度は低い。1660年代以降のものと比較すれば、それらは単にイーヴリンが作家としての本領を發揮する前段階の作品群として扱われている程度であ

る。たしかに初期の作品群は分量的に短く、内容としては *Sylva* に見るようなイーヴリン独特の発想そして専門性が乏しいと言えよう。しかしながら共和制下という時代背景を考慮すれば、のちに詳述することになる自説の核心をその可能性の範囲内で大いに主張した作品とみなすことができる。

この小論では王政復古直前の1659年に出版されたトラクト“A Character of England”を取り上げ、ロイヤリストとしての著者の意見表明であるこの作品の特性を考察したい。それと同時に、この作品が共和制下イングランドに対する痛烈な諷刺であるだけでなく、イーヴリンが王政復古後発表することになる複数の作品の原点となる貴重な著作であることを証明していく。

1

“A Character of England, As it was lately presented in a Letter, to a Noble Man of France” (以下“Character”と略す) は、1659年著者/翻訳者の名前を伏せて発表された文書である。内容はつぎのような多少複雑な設定に基づいている。まず、原書の著者はイングランドを訪れたフランス人旅行者であり、内容はこの人物がフランスのとある高貴な身分の人に宛てて書いた書簡風の報告書になっている。外国人の目を通して見たイングランドの外観と彼の滞在中の経験が、あからさまな批判を交えて綴られる。設定では原文はフランス語である。そして、フランス語で書かれたこの報告をひとりのイギリス人が入手する。イングランドに否定的な内容のため、このイギリス人は作品の翻訳の是非を自問自答するが、しかしながら思い切って英訳を試み、出版に至ったとされる。無論この設定はイーヴリンの創作であり、実際には最初から彼が執筆したトラクトであることは今となれば確かである。ただし、このややこしい、間接的な出版の仕方は、当時の複雑な社会情勢を暗示している。オリヴァー・クロムウェルが死去したあととは言え、このトラクトが出版されたのは王政復古の前年であった。逆に言えば、本当に国王が権力を回復するのか、また具体的にそれがいつ実現するのかということには確信が持てなかつ

た時勢である。イーヴリンはそのような不安定な状況の中、フランス人旅行者の手記を英語に直したという設定で、しかも翻訳した人物の名前も伏せてこの作品を発表した。読者への前書きではイングランドを酷評する文書を翻訳した理由についてつぎのように語る。

... I was so much concern'd with the honour of our Country, that it was my resolution to suppress the publication of our shame, as conceiving it an act of great inhumanity; But upon second, and more impartial thoughts, I have been tempted to make it speak English, and give it liberty, not to reproach, but to instruct our Nation; (75)¹⁾

言い訳のようにも聞こえる前書きの中で翻訳者は、最初は国の名誉を思い公表をやめようと決めたが、考え直して敢えて発表に踏み切ったとして、むしろ愛国心から翻訳を試みたことを主張している。イングランドの欠点をさらすことにより、それを読者に気づかせ、国を改善の方向へ進ませたいと言うことによって、自身が実は当時のイングランドに批判的であることをカモフラージュしている。当時は依然としてあからさまに王政を擁護することは危険であり、イーヴリンがつぎに書いたトラクト“An Apology for the Royal Party”も1659年11月に匿名で出されている。

“Character”は12折版(duodecimo)、全66ページで出版された。出版者はロンドンとアイルランドで書籍出版業を営んでいたジョン・クルック(John Crooke)である。いかにしてクルックがこのトラクトを単独で扱うことになったのか興味深いところだが、経緯は不明である。クルックはのちにイーヴリンのトラクト“Tyrannus, or the Mode”(1661)を他の書籍商と共同で扱っている。また、“Character”は出版同年に第3版まで発行された。同時代人にとって大いに興味を惹かれる内容であったことは間違いない。ただ、こういった反響を著者本人がどのように感じてい

たかは残念ながら知るすべがない。そもそもイーヴリンは日記の中でたびたび自身の著作について言及する傾向があるのだが、この作品については執筆に至った経緯や出版の時期など何も記録してはいない。“Character”出版の同年にやはり作者不詳で出された“An Apology for the Royal Party”と比較すればその差はあまりにも大きい。1659年11月7日の日記には次のような記述がある。

Was published my bold *Apology* for the King in this time of danger, when it was capital to speak or write in favour of him. It was twice printed; so universally it took.²⁾

このように、国王の利益となるような言論を行うことは大罪となる危険なときに、大胆な“Apology”、国王擁護論が出版されたことをイーヴリンは記している。また、印刷が2度にわたったことに触れているため、反響が気になる様子も窺える。その一方で、3版が出された“Character”についての言及は日記には一切ないし、さらにイーヴリンは晩年に作成した著作リストにもこれを掲載していない。³⁾ 単に記載しそびれたのか、それともイーヴリン自身、この作品を重視していなかったのかは明らかになっていない。しかしながら、実はこの“Character”にはのちのイーヴリンの作品、“Fumifugium”(1661)、“Tyrannus”(1661)、“Londinium Redivivum”(1666)の中心となるテーマが含まれており、長い時間をかけて彼がそれらの問題を考察し、構想を深めていったことが推察される。

“Fumifugium”と“Tyrannus”はともに王政復古後の1661年の出版で、国王チャールズII世に宛てて書かれた提言である。“Fumifugium”はサブタイトルが“The Inconvenience of the Aer and Smoak of London Dissipated. Together with some Remedies humbly proposed By J.E. Esq; To His Sacred Majestie, and To the Parliament now Assembled.”となっており、

ロンドンの大気汚染についての問題提起とその解決策について、国王と議会とに向けて書いたとされている。一方の“*Tyrannus or the Mode: In a Discourse of Sumptuary Lawes*”のテーマはイーヴリンの扱う問題としては特異であり、ファッション（衣装）に関する提言となっている。最後に、“*Londinium Redivivum*”は王政復古期ロンドンで都市計画委員を経験したイーヴリンが、1666年のロンドンの大火という惨禍に見舞われた直後の市街地再建に関する自らのアイデアをまとめ国王に提示したものである。いずれもイーヴリンの優れた学識、大陸諸国での見聞、経験を生かして執筆された作品である。王政復古後に個別の作品となって世に出たが、これらの作品の核の部分は、“*Character*”の中で互いに関連した事柄として埋め込まれている。

2

作者不詳で出版されている上にイーヴリン本人による著作リストにも掲載されていないが、“*Character*”には明らかにダイアリーの記述と重なる部分が目立つ。1651年から56年ごろまでの日記には特に共通した記述が多く見受けられる。トラクトの冒頭にまず注目してみよう。語り手であるフランス人旅行者がカレイからドーバーに渡り、馬を借りてロチェスターへ移動して宿をとったという経路は、イーヴリンが1651年2月にフランスからイングランドに帰国した際のもと同様である。語り手はまずドーバーにて土地の人々が「人を疑うような、近づきがたい面持ち」(“*suspicious, and forbidding countenances*”)であり、外国人が多く出入りする港の近くにおいてさえも非常に排他的な印象を与えることを記す。これは特にフランスもしくはカトリック教会に対する警戒心の表れとも考えられよう。さらには馬を借りてドーバーから出た途端、数人の少年たちにあとを追われ、独特な「歓迎」の叫び、“*French Dogs, French Dogs, Mounser, Mounser!*”といった侮辱的な言葉を浴びせられたことを書いている。若者の礼儀知らずな振る舞いは、特にこの国にあるいはこの時代に限らないであろう。だが、旅人

をさらに驚かせたのはロチェスターの宿の主人の不法行為である。客と共に酒を酌み交わし、平気でゲップをし、タバコの煙を客の顔に吹き付けるといような行為は、旅人にとって「初めて見る事」の連続であった。しかしのちに彼が旅行をする中で気づいたのは、これがイングランドの「スタイル」であり、珍しくはないということであった。イーヴリン自身も1651年、カレイ〜ドーバー〜ロチェスターという経路をたどって家に戻っている。ロチェスターの宿屋での具体的な経験についてはダイアリーに記されていないが、長年ヨーロッパ大陸で過ごした彼が共和制下のイングランドに戻って人々の冷淡さ、厚かましさを味わったときの失望感をこの旅人の印象が多少なりとも反映していると容易に推察される。

ロチェスターからロンドンに入った旅人が描写するのは、あまりにも不潔で汚れた町の姿と人々の荒んだマナーである。“*The Metropolis of civility, London*”に対する期待は見事に裏切られてしまい、彼はこの町を“*Legion of Devils, and in the suburb of Hell*”と評するようになる。カレイからの道中と同様に、ロンドン市内を馬車で移動する間も旅人は不愉快な経験をする。馬車には子どもが汚物やごみを投げつけ、御者の運転は乱暴であり、さらに御者は身分の高い者に対して雑言を吐くのであった。ロンドンの市内を走る馬車の評判は悪く、お産に駆けつけるときの産婆に例えられるほどである。ちなみにダイアリーでは1652年11月5日に、ロンドンの通りが無礼な者で溢れかえり、あまりのひどさに翌日まで帰宅できなかったことが記されている。秩序あるパリから訪れた旅人には、ロンドンの行政官(magistrate)がなぜこのような無秩序を放置しているのか理解できない。だが最終的に彼は“... these are the naturall effects of parity, popular Libertinism, and Insulary manners”と言って、この混乱が地理的な影響からくるものであると同時に、平等や放蕩を好む時代の弊害であることを結論付ける。上層階級のみから見れば、初期スチュアート朝までは国王を頂点としたヒエラルキーが維持されていたがゆえにイングランドの秩序は保

たれていた。それが共和制時代には脱階級社会の方向へ進み、イーヴリンのようなロイヤリストの視点からすれば行き過ぎた平等主義によって、宿屋の主人や馬車の御者がぞんざいな態度で身分の高い客に接するように変わってきていた。さらにはヨーロッパ大陸から海を隔てた島国であるという地理的な条件も手伝って人々のマナーは洗練されず、イングランドは無作法な人間の住む国としてパリからやって来た旅人に描写されている。

それではロンドンの外観は旅人の目にどのような印象に映ただろうか。大火前のロンドンの様子は“a City consisting of a wooden, northern, and inartificiall congestion of Houses”と記される。当時ロンドンでは木造住宅が雑然と軒を並べる街であった。一方、大陸諸国における都市ではルネサンス建築が立ち並び、道路建設もより計画的に進められていた。その点ロンドンは後れを取っていた。つまりここで言う“northern”は「ヨーロッパ北部の、いまだルネサンスの波が訪れていない、中世の」という意味であると考えることができよう。語り手である旅人は、ロンドンでは主要な道路でさえも時には大変狭く、城壁の中は不均整で、遠くからの眺めは特に醜いと記している。テムズ川南岸のサザーク地区から望むロンドンの様子を描いた初期スチュアート期の版画（たとえばヴィッシャー [C. J. de Visscher] やホラー [Wenceslaus Hollar] によるものなど）からは、城壁の内部が特に込み入った大火前のロンドン市内の様子を確かにうかがい知ることができる。そこにはチューダー式のハーフティンバーの建築が狭い道路に沿って並んでいたことが見受けられる。“Inartificial congestion of Houses”はまさにこのような光景を指す。のちにロンドンでは新築が禁止されることになる木造3階建てベイウインドウ付きの住居が、なんら統一性のないままに軒を連ねていたのであった。パリの他にも大陸各地を訪れヨーロッパ諸国の町並みや建築を熟知していたイーヴリンには具体的に理想とする都市の姿があったため、この中世のままの町にいずれルネサンスの風を吹き込まなければならないという思いは強かったに違いない。彼はのちの1666年に“Londinium

Redivivum”を国王に献上し、彼の目指すところの新たな都市の姿を提示した。整然とした区画、道路整備に加えて、彼の描く都市像にルネサンス建築は不可欠であった。

“Character”の中で、ロンドンの建築で例外的に美しく卓越したものが2つ示されている。それらは聖ポール寺院のポーチコ（柱廊式玄関）とホワイト・ホール宮殿バンケティングハウスで、ともにイニゴ・ジョウンズ (Inigo Jones, 1573-1652) によるルネサンス建築である。ジョウンズは大陸に学び、イングランドに新たな建築スタイルを導入した。のちにジェームズ一世から高く評価され、宮廷仮面劇の製作に関わると共に王室による建築のすべてを任されるようになる。イーヴリンにとってみれば、ジョウンズこそ近隣諸国にひけをとらないルネサンス建築をイングランドに広め、王室の栄光そしてイングランドの文化の繁栄を他国に知らしめることを可能とした人物であった。

聖ポール寺院はその後1666年ロンドンの大火で焼失しその後再建されているが、ホラーのエッチングから大火前の姿をうかがい知ることができる。ポーチコは1630年代の改築の際に寺院の西側入り口部分に設けられた。当時では北ヨーロッパ最大規模のポーチコであり、高さ66フィート、長さ120フィートに及び、イーヴリンが好んだパラディオ式の古典主義建築であった。“Character”の旅人によれば、フランスでも注目されるほどの建造物であった聖ポール寺院が、いまや本来の荘厳な姿から一転して「受難の地」と化していた。屋根のついた柱廊として美しい佇まいを誇ったポーチコは市場となっている。

O! how lothsome a Golgotha is this Paul's! I assure your Lordship, that England is the sole spot in all the world, where, amongst Christians, their Churches are made jakes, and stables, markets and Tipling-houses; and where there were more need of Scorpions, than Thongs, to drive out the Publicans and

Money-Changers: In sum, where these excellent uses, are pretended to be the markes of Piety and Reformation. (79)

実際に、当時は聖ポール寺院の大部分が教会として機能していなかった。説教のためのホールとして確保された一部を除けば、寺院は引用部分にあるような雑多な目的―手洗、厩、店、居酒屋など―のために使用されていたのである。イーヴリンは、本来の教会としての崇高な目的から逸脱したこれらの用途を“these excellent uses”と皮肉を込めて表現する。そして、イングランドはこれらを「敬虔と改革のしるし」とする、世界で唯一のキリスト教国であると痛烈に批判している。

一方のバンケティングハウスは1622年に完成したスチュアート朝の栄華を象徴するパラディオ式石造建築である。これは、現存する数少ないジョウンズの作品でもある。そもそも1619年に焼失した古いバンケティングハウスに代わるものとして、イーヴリンがフランスやイタリアで交流を持ったアルンデル卿も委員として加わって建築計画が進められた。3ヶ月程度で建築の案は固まり、当時の名工を集めて建物は3年ほどで完成したという。完成したバンケティングハウスは、ホワイトホール宮殿の一部として、国内外からの賓客、大使らを迎えるバンケットや、ジョウンズも制作に関わっていた宮廷仮面劇が行われた場所として機能するようになった。その後1635年にはルーベンスの作によるジェームズ一世そしてチャールズ一世にまつわるテーマの天井画が設置され、ロイヤリストにとってはさらに特別な意味を持つ建造物となったのである。

バンケティングハウスも聖ポールのポーチコも初期スチュアート朝を代表する建築であり、ロイヤリストにとってはチャールズ一世の時代を偲ぶせる壮大なルネサンス建造物であった。のちにイーヴリンは、1666年にクリストファー・レン(Christopher Wren, 1632-1723)らとともに聖ポール寺院の修復/再建のための調査員に任命されている。ロンドンの大火直前の8月末に聖ポール寺院を訪れたイーヴリンはこの中世ゴシック建

築の教会を同じ委員の仲間たちと共に調査しその後の修復計画について意見を交わしたことが日記に残されている。さらに大火後の9月7日の日記では、聖ポール寺院が無残に焼け落ち、ヨーロッパ有数のあの美しいポーチコが粉々に壊れてしまったことを記している。彼の聖ポール寺院への思いは特別なものであった。

At my return, I was infinitely concerned to find that goodly Church, St. Paul's - now a sad ruin, and that beautiful portico (for structure comparable to any in Europe, as not long before repaired by the late King) now rent in pieces, flakes of vast stone split asunder, and nothing remaining entire but the inscription in the architrave, showing by whom it was built, which had not one letter of it defaced!

ロンドンで卓越した建築物は2点であると語る一方で、旅人は一般の建築については統一性がなく、「市民の心や混乱と同様に醜い」(“as deformed as the minds & confusions of the people”)と伝える。また、中世の木造建築が多いロンドンでは火事が珍しくはないが、たとえ火事になったところで行政官には整然とした町並を創造する力も意図もないと批判している。当時ロンドンの町は馬車、店、居酒屋、騒音でごった返している状態であった。実際には1662年、イーヴリンはロンドン市内の建物や道路の再建等を検討する委員に任命されている。彼にとってはヨーロッパ諸国で養った感覚をイングランドの都市計画に反映させる機会であった。また、大火後まもなくイーヴリンはロンドンの市街地再建案を“Londinium Redivivum”において国王に献上している。ロンドンの大火はイーヴリンが厭わしく感じた古い町並みをすっかり破壊し、それゆえに新たな道路整備、広場(piazza)建設、工場などの郊外への移転等の提案をする現実的チャンスの到来を意味するものとなった。彼は例えば道路の幅を規定し、主要道路は100フィート以上、最も狭い道路でも30フィート

以上にすべきだと主張した。また、建築物を規制して統一した外観の町並みを作ることや広場に噴水を設置することなど、ロンドンを中世の町からルネサンスの町への変貌を遂げさせるための案を盛り込んだのであった。結果的にはロンドンの再建に彼の意見は採用されなかったのであるが、イーヴリンが“Character”執筆時から構想していた新しいロンドン像は“Londinium Redivivum”において完結し国王の前に示されたのである。

さらに旅人はロンドンの大気汚染に言及する。この当時から「霧のロンドン」という表現が適するかのように、町は石炭（“sea-coal”）の煙に満ちていた。そしてこの煙が人体に重大な影響を及ぼすものと旅人に気づかせたある経験が記されている。“I have been in a spacious Church where I could not discern the Minister for the Smoak; nor hear him for the peoples barking”と語るように、教会の中に煙があまりにひどく蔓延し、牧師の姿は見えず、その声は聴衆の咳でかき消されたのだ。たちこめる煙でロンドンは「地上の地獄」とまで評される。ロンドンの大気汚染とその対策についてイーヴリンはのちに“Fumifugium”（1661）で国王チャールズ II 世と議会にあてた提言を発表しているが、そこにも類似した光景が描写されている。場所は宮廷においてだが、やはり煙が蔓延し、互いの姿を認識することも困難であったほどだったという。そこで大気汚染の原因と考えられる工場などの郊外への移転を奨励し、市内に芳香が漂うよう緑を増やしハーブ類を栽培することについて提案している。ここで示されるイーヴリンの樹木および植物への造詣の深さはのちの *Sylva* においてより詳細に、発展した形で発表されることになる。

3

イーヴリンがイングランドに欠如している要素として“Character”で指摘するのは「節度」—“moderation”—である。彼は様々な問題を提示するが、その根源には共通して“moderation”の欠如がある。“Character”において最も多くの分量を割いて旅人が語る事柄は、共和制下のイン

グランドの教会と宗教のあり方である。そもそも1650年代は英国国教会の活動が抑圧されていた時代であり、敬虔なアングリカン教徒のイーヴリンがフランス帰国後に目にしたイングランドの教会は英国国教会最盛期でもあったスチュアート朝時代のものからはすっかり変わってしまっていた。これはさきに触れた聖ポール寺院の例でも明らかである。そして変化は小規模の教会でも当然起こっていた。イーヴリンは1652年3月14日の日記で、もはや国教会司祭の姿を教区教会の説教台で見ることがまれであること、教会が独立派と狂信派で溢れていることを伝えている。“Character”においても第一に旅人が語るのは、いかがわしい狂信的クリスチャン、とくに長老派のことである。

旅人が問題視するのは次のような点である。長老派はスイスやフランスのプロテスタントの影響を受けつつも本家とは異なる解釈を行っている。また、礼拝では形式を重んじず、祈りや聖書朗読にも「メソッド」がない。具体的には、会衆が帽子をかぶったまま座って詩篇の朗読を聴き、歌うときに帽子を取るといったことである。また、聖書すら読まない礼拝も多く、そのようなところではメソッドに従わない無味乾燥な祈りが「カンティング」と呼ばれる不自然で怪しい調子で行われている。元来イーヴリンが好んだのはアングリカンチャーチの厳かな儀礼であった。ところが護国卿時代の教会の雰囲気は、すっかり世俗的なあるいは偽善的なものに変貌していた。

教会の方針に対する批判も鋭い。牧師は品格も教養も説教をする者としてふさわしくなく、祭壇に上がる者の中には“Mechanick”と呼ばれる輩もいる。国教会全盛期には考えられなかったことだ。さらに、全ての儀礼が禁じられ、もはやカテキズムもなければ sacrament が行われることもなかった。イーヴリンのダイアリーからは、彼が聖餐を特に大切にしていたことがうかがえる。フランスから戻った1652年以降、ひそかに聖餐式に与った経験を何度も記している。国教会司祭を自宅に招き、説教のあと聖体拝受を行うか、あるいは敬虔な信徒が集まるロンドンのワイルド氏宅を尋ね聖餐式に与るという方法をとっていた。それほど

この儀式は熱心なアングリカン信徒にとって重要な意味を持つことであった。しかし“Character”にあるように、1650年代イングランドでは一般に洗礼すらもその他の sacrament と同様に行われなくなっていた。祈祷書の使用によって統一されていた教会の儀式はすべて否定されてしまい、それぞれ好き勝手なやり方を実践している。そしてキリスト教の聖なる祝日さえも守られないことが強調されている。クリスマスまでも同様であり、イーヴリンはこの記念すべき日に教会が閉ざされていることをダイアリーにも記した。また、当時は主の祈りも捧げられていなかった。共和政時代の主流派からするとクリスマスなどは迷信であるし、主の祈りはスチュアート家やカトリックの王に捧げられるともみなされる故に不適切であると判断されていた。これらはみな革命を契機に発生した問題である。大司教ロードが中心となったアングリカンチャーチへの反発が抑制の効かない範囲にまで広がった結果だと言えよう。

節度の欠如として別に言及される事柄は酒である。旅人は、イングランドの男性の間では過度の飲酒が当たり前になっていることに驚く。これは居酒屋でも自宅でも同様で、女性や従者の前でもかまわずに、そしてときには刃傷沙汰に発展することもある。旅人はある地方の紳士の家での食事に招かれたときの実験の経験について、詳細に伝えている。食後に男性客だけで杯を酌み交わしている間にトラブルが起こり、流血のもみ合いとなったことである。はじめは男たちのこのような飲酒癖とそれが引き起こす結果とに驚いていた旅人も、そのうちに同様なことが頻繁に起こるため慣れてしまったというが、このように節度を越えた振る舞いがイングランドの人々に共通した問題として繰り返し指摘されている。

また、衣装に関する記述もある。これについても人々の節度を問題視した内容となっている。

“Character”においては旅人の目にイングランドのファッションが奇異に映る。

The women are much affected with Gaudry, there being nothing more

frequent, than to see an antient Ladie wear colours, a thing which neither young, nor old of either Sex do with us, save in the Country, and the Camp; but widows at no time. And yet reprove they us for these exorbitances; but I have often disputed the case: Either we do ill, or well; if ill, why then do they ape us? if well, why do they reproach us? The truth is, they have no moderation, ... it is not an easie matter to distinguish the Lady from the Chamber-maid; Servants being suffered in this brave Country, to go clad like their Mistrisses, a thing neither decent, nor permitted in France, where they may wear neither lace, nor silk. (85)

イングランドではフランスのファッションを真似ていたが、これについても節度を超えていた。

イングランドでは華美な衣装が好まれ、フランスでは田舎や軍隊以外では誰も着ないような派手な色を年配の婦人が身にまとっていたらしい。また、フランスではやはりありえないこととして、使用人階級の者がレースやシルクをまとっている。イーヴリン個人はそもそも衣装に関してはむしろ保守的でありシンプルなファッションを好んだ。

“Tyrannus or the Mode” (1661) ではフランス式ファッションを嫌い、外国の影響から免れ独自のスタイルを持つべきだと主張している。また、古代ローマのように身分によって異なる衣服をまとったり、上の引用と同様に階層に応じて身に着ける素材を限定することを提案する。また、シルクやレースを贅沢品とみなし、輸入品よりもむしろイングランドで生産するウールの価値を強調している。“Tyrannus”における指摘は衣装だけに限らず宮廷のフランス化/カトリック化を牽制する狙いもあったのだが、“Character”の時点で既にイーヴリンはフランスの「猿真似」をやめるべきだと示唆している。

まとめ

共和制時代、イーヴリンは母国に失望していたとは言え、それを見捨ててはいない。作品のところでどこでイングランドのポジティブな面にも触れている。批判する一方でイーヴリンは、美しいイギリス人女性を、本来は緑豊かな自然環境を、そして肥沃な大地をつぎのように賛美している。

It must be avowed that England is a sweet, and fertill Country.

Terra potens armis, atque ubere gleba:

That the Fields, the Hills, and the Vallies are perpetually clad with a glorious, and agreeable verdure; that her provisions are plentiful; her staples important; and her interest very considerable; not omitting the most beautiful Ladies, I had almost said, of the world,

1640年代の市民革命では各地での戦いによりイングランドの自然美の多くが損なわれてしまった。そして、続く共和政時代は初期スチュアート朝までの価値観を否定するものとなった。英国国教会、とくに高教会で守られてきた荘厳な儀礼は禁じられ、諸外国に対しても誇るべき名建築の聖ポール寺院のポーチコは世俗的な活動によって冒涇され傷められている。共和制イングランドにおける平等主義は、人間の品格、宗教のありかた、町並み、教会など、あらゆる事物に反映し、フランスから戻ったイーヴリンの目には異様なものとして飛び込んできたのであった。パリをはじめとする洗練された都市とは対照的な祖国の町並みや建築に、彼は落胆せざるを得なかったはずである。ただし、彼はトラクトにおいて1650年代のイングランドに対する批判をしつつも、実は修復の方法を模索しあるいは既に具体的な構想をめぐらしていた。その思考がのちに“Fumifugium”, “Londinium Redivivum”, “Tyrannus”といった個別の作品となって世に出ることになる。彼は王政復古期に率先してイギリス文化の再構築を試みた。王政復古と同時に国王を中心とした文化

が再び繁栄することを信じて、あらゆる分野の知識を駆使して国王への提言や王立協会での活躍を通してイングランドの進歩に貢献したのだ。

“Character”は彼の信念のあらわれであり、王政復古後に発表することになる作品群の原点とみなすことができる。

“Character”は、フランス人旅行者の報告という形を取っているものの、その「異国」からの旅人は実はイーヴリン本人であり、このトラクトにおける1650年代のイングランドはイーヴリンにとっても故郷と呼べるものではなかった。1640年代の革命期イングランドを離れ、1650年代の護国卿時代には領地に引きこもり、真のロイヤリストとしての心情を持ち続けた彼は、共和制下のイングランドが革命の後遺症によって他のヨーロッパ諸国から遅れをとり、品格と秩序を失った、憂うべき状態になっていることに失望している。この国は、あらゆる点において彼が知るかつての誇り高い王国とは全く性格を異にするものとなっており、自らもこの国には属さない旅人に等しいと感じたに違いない。“Character”においてイーヴリンは、当時「異国」と化していたスチュアート朝からの旅人として1650年代のイングランドを風刺し批判したのである。

Selected Bibliography

- Lubbock, Jules. *The Tyranny of Taste*. New Haven and London: Yale UP, 1995.
- de Mare, Eric. *Wren's London*. London: Folio Society, 1975.
- Morill, John, ed. *Tudor and Stuart Britain*. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Parry, Graham. *Hollar's England*. Salisbury: Michael Russell, 1980.
- Parry, Graham. *Seventeenth Century*. London: Longman, 1990.
- Plomer, H. R. et al., eds. *Dictionaries of Printers and Booksellers, 1557-1775*. London: Bibliographical Society, 1977.
- Summerson, John. *Architecture in Britain, 1530-1830*. 8th ed. London: Penguin,

1991.

Worden, Blair, ed. *Stuart England*. Oxford: Phaidon, 1986.

注

- 1) イーヴリンの各作品の引用は Guy de la Bedoyere によるエディション、*The Writings of John Evelyn* (London: Boydell, 1995) に収められたテキストに

よる。

- 2) イーヴリンの日記の引用はすべて Austin Dobson のエディション、*The Diary of John Evelyn*, 3 vols, (London: Macmillan, 1906; rpt. London: Routledge /Thoemmes Press, 1996) より行う。
- 3) 王立協会の幹部であった Robert Plot に宛てた 1682/3 年 3 月 16 日付の書簡において、イーヴリンは自らの著作リストを示した。だがそこに “Character” は載せられていない。